

結・creation

茅渚の海と鴉の湖・なかをとりもつ淀川の流れ

実施期間：2023年4月8日（土）～2024年3月31日（日）



【事業の内容・目的】

- 「水と人との関わり」「流域から海へのつながり」をテーマに、琵琶湖（鴉の湖）・大阪湾（茅渚の海）、そして、それらをつなぐ淀川で、体験型の学習や現地見学の実施を通じ、参加者やスタッフが身近な海とその周辺環境に関する系統的な知識と経験の両方を得ることを目指す。
- 大阪湾・琵琶湖・淀川「生物」「地学」「民俗または産業」をテーマに、具体的な項目の検討と、安全管理を兼ねた安全管理を兼ねた現地の事前調査を行い、ワークショップのプログラムを作成する。
- 本事業の関係者による活動成果発表を支援し、実施することで、琵琶湖・淀川・大阪湾関係者のネットワークの構築を行う。また、本事業の成果を冊子にまとめ、図書館を含む各所に配布することで、さらなる連携の広がりを試みる。

活動の様子

1. 題材の検討およびプログラム開発

【開催日時】2023 年 7 月 5 日～2024 年 2 月 10 日

【開催場所】琵琶湖（瀬田川、沖島）、淀川（庭窪ワンド、城北ワンド）、亀岡盆地、大阪湾（岸和田漁港、阪南 2 区人工干潟、せんなん里海公園、城ヶ崎海岸、成ヶ島他）、滋賀県立琵琶湖博物館

【参加者数】のべ 30 人

【活動内容・目的】

- 淀川水系、大阪湾は私たちにとって身近な存在であるが、環境や生き物の多様性について学ぶ機会はごく限られている。また流域全体から海へのつながりを考える時、地域の持つ多様性を知ることは重要である。
- 本調査では、貝類に焦点をあて流域の生物多様性を明らかにすることを目的として、琵琶湖、淀川、大阪湾各地で採集を行い、水系ごとで貝類の標本作成を行った。



守口市庭窪ワンドでの調査
(2023 年 8 月 10 日)



庭窪ワンドのミナミタガイ
(2023 年 8 月 10 日)



瀬田漁港での貝曳き漁調査
(2023 年 10 月 10 日)



水路での調査で見つかった
ヒレイケチョウガイ
(2023 年 10 月 10 日)



干潟で採集されたムラサキガイ
(2023年8月4日)



成ヶ島での調査
(2023年9月24日)



底びき網漁の観察会
(2023年8月27日)



教材用標本の作成と指導

場所は、琵琶湖では沖島（滋賀県近江八幡市）、守山市内の水路、瀬田漁港および堅田漁港（大津市）、淀川流域では庭窪ワンドおよび城北ワンド、亀岡盆地（京都府亀岡市）、大阪湾では岸和田漁港（大阪府岸和田市）、福島海岸（阪南市）、せんなん里海公園（泉南郡岬町）、城ヶ崎海岸（和歌山県和歌山市）、成ヶ島（兵庫県洲本市）で、貝類の生息状況の記録に加えて、本事業で使用する普及教材用の標本を採集した。

瀬田漁港や沖島で採集した貝類は滋賀県立琵琶湖博物館の研修室にて標本化を行い、その際に近畿大学の上地健琉氏の指導のもと、標本作成方法について学んだ。



淀川水系を学ぶ貝類標本のキット



貝類標本の一例

貝類の採集は滋賀県立琵琶湖博物館、大阪府環境農林水産総合研究所の職員、大阪市立自然史博物館外来研究員と合同で実施し、普及用プログラムの内容についても意見交換を行った。作成した普及用教材は事業②のワークショップ等で試行的に運用し、必要に応じて標本にする種の検討を行った。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

2. 現地見学を含む体験型学習会

【開催日時】2023年8月27日・9月3日・9月30日・11月23日・12月16日・2024年1月8日・2月25日・3月10日・3月17日・3月20日・3月23日

【開催場所】岸和田漁港・きしわだ自然資料館・南海浪切ホール・道の駅愛彩ランド（以上大阪府岸和田市）・池上曽根弥生学習館（大阪府泉大津市）・府立弥生文化博物館（大阪府和泉市）・大阪市立自然史博物館（大阪市）・高槻市立自然博物館（大阪府高槻市）・高島市立今津北小学校（滋賀県高島市）・瀬田漁港および堅田漁港（滋賀県大津市）・矢橋帰帆島（滋賀県草津市）

【参加者数】 のべ3542人（11月23日が主催者公表のべ3000人）

【活動内容・目的】

●連続講座では琵琶湖・淀川・大阪湾で立案したプログラムを実施するとともに、大阪湾岸で琵琶湖や淀川の貝類紹介や、琵琶湖で大阪湾のチリメンモンスター紹介など、地域をつなぐ行事を行い、身近なフィールドと他の水系との繋がりを体験しながら学び、身近な場所から視野を広げることが目的とした事業を行った。



開催場所の様子（岸和田漁港）



琵琶湖でのチリメンモンスター事業のようす
（高島市立今津北小学校）



事業の様子（堅田漁港）



事業の様子（きしわだ自然資料館）

海・川・湖をめぐる連続講座では、座学、体験、博物館での見学をセットにし、共通点や違いを見出せるように配慮した。また、移動の時間もコミュニケーションの時間ととらえ、バス移動の際には、質疑応答や次の取り組みのレクチャーの時間に充てるとともに安全管理にも配慮した。また、琵琶湖での海の行事、大阪湾での琵琶湖や淀川に関する行事では、身近な環境とのつながりが実感できるよう、専門家によるお話を重視した。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



貝標本の説明（きしわだ自然資料館）



河川の魚道を学ぶ（あくあびあ芥川）



高倍率の顕微鏡による稚魚の観察
（大阪市立自然史博物館）



淀川支流での生き物観察
（高槻市芥川緑地）

貝標本を使ったプログラムでは専門家による説明や貝類図鑑を活用し、参加者が興味をもてるような投げかけを意識する一方、説明しすぎないように、まずは先入観なく標本をみてもらえるよう心がけた。また、標本とともに周辺水域の地図なども掲示し、プログラム参加者の居住地とのかかわりが学べるようにした。河川の学習では、海と川、湖を行き来しやすくする仕組みなどを土木的観点からの説明を行った。また、古琵琶湖層群の貝化石との比較も行い、地学的なつながりも実感していただいた。

【参加者の声】

- 海や川、湖は生き物がたくさんいるから大切にしなければと思った（11才）
- 孫がとても楽しそうだった。街にいとあまり海や川、湖について考えたことがないが、これを機会に少し考えてみようと思えた（73才）
- こどものためにも、たくさんの生き物が増える海や川、湖になってほしいと思った（保護者）
- 海も川も湖も、実際の場所について生き物探しをしたい（4才）
- いろいろな生きものがあることがとてもよくわかったのでいろいろな魚や貝を食べようと思った。（7才）

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

3. 活動成果発表とネットワーク構築

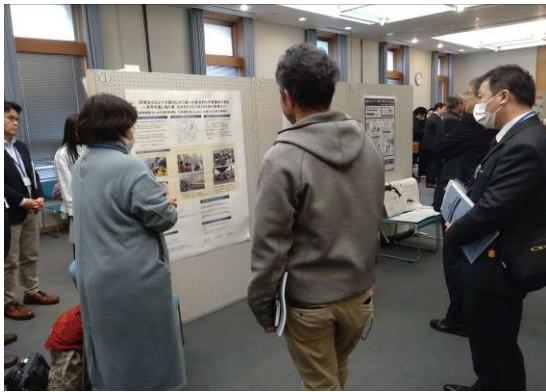
【開催日時】2024年2月18日・22日・3月10日

【開催場所】きしわだ自然資料館・滋賀県立琵琶湖博物館・大阪市立自然史博物館

【参加者数】421名

【活動内容・目的】

- 市民活動成果の場を活用して、今回の活動を報告することで、新たな機関との連携を促進する。
- 今回の活動成果冊子を作成し、図書館をはじめとする各所に配布することで、新たなネットワークづくりのきっかけとする。



発表のようす（滋賀県立琵琶湖博物館）



発表のようす（きしわだ自然資料館）



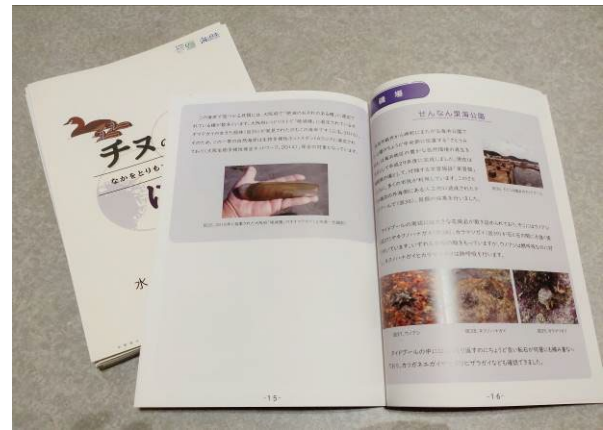
発表のようす（大阪湾フォーラム）

今回の事業についての発表を行うことで、より多くの団体に本事業の内容を周知するとともに、各分野の専門家から意見をいただき、議論することで、来年度以降の事業のブラッシュアップにつながった。予定では、本事業参加者に発表していただきたかったが、残念ながら実現できなかった。また、今回の事業についてまとめた冊子を作成することで、多様な連携を生み出すきっかけになればと考える。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



今回作成した冊子



冊子紹介



掲載された調査時の写真



掲載された調査時の写真

事業の基礎データとなっている水系の貝類調査を、広くたくさんの方に関心を持ってもらえるように、標本の補助ツールとして調査や結果についての紹介冊子を作製した。標本は3セット作成し、滋賀県立琵琶湖博物館、大阪市立自然史博物館、きしわだ自然資料館へ寄贈に向けて手続きを進めている。冊子は、水系全体で手にすることができるに、流域の図書館や関連学部のある大学、河川管理者や行政の環境部署など300カ所へ寄贈した。参加者等の興味関心を継続させる環境づくりのひとつとして、成果を活用することができたのではないかと考えている。

【参加者の声】

- 海が単体としてあるのではなく、水系全体で総合的に学ぶ機会を創出することで、子どもや関わる大人にも理解を深めることができました。(64才)
- 海域環境保全において、流域のつながりを意識する重要性を考えさせられた。(24才)
- 二枚貝に着目したことが面白いと思った。(55才)
- 総合的に水系を知ることの重要性を考えることができた。(69才)
- どんな小さな発見でも見過ごさず、追及していく姿勢が大切だと思いました。(61才)
- 子どもも対象に含めた、人の生業と環境に対する事業があることについて知れた。(19才)

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。

【事業全体のまとめ】

水系全体を視野に入れた計画の中で始まった事業であったが、物理的な範囲の広さ、関連するテーマの多さ、地域によっての文化の違いなど、多様性をどのようにとらえて反映していくかが課題であった。そこで、事業を支える情報の源になるべく、事前調査にしっかり時間をかけておこなえたことがその後の発展などに繋がっていったと考えている。テーマを決めるときも、プログラムの企画をするときも、水系貝類の調査結果をベースにということでブレずに取り組むことができた。企画がブレなかったこと、関わるスタッフの数が増えても共通認識が持てたことで、参加者へ伝えたいと考えていたことをうまく伝えられるようになったと考えている。

まだ始めたばかりの試みではあったが、多くの方から関心を持ってもらい、参加者には次の予定などを聞いてもらえるようにもなれた。単発のイベントとしては流れも確立することができつつあり、パッケージ化しての展開も実現可能となってきた。今後はモデル事業のブラッシュアップと定着、パッケージ化をめざし、活動の継続と発展をしていきたい。

主な連携・協力先について

連携・協力先名称	連携・協力の内容
1. 滋賀県立琵琶湖博物館	調査協力および体験プログラム企画・実施協力
2. 高槻市立自然博物館	体験プログラム企画・実施協力
3. 岸和田漁業協同組合	調査協力および体験プログラム企画・実施協力
4. 瀬田町漁業協同組合	調査協力および体験プログラム企画・実施協力
5. 堅田漁業協同組合	調査協力および体験プログラム企画・実施協力
6. 滋賀県立大学環境科学部環境政策・計画学科 瀧研究室	体験プログラム企画・実施協力
7. 大阪府立環境農林水産総合研究所	調査協力

主な広報結果について

掲載媒体名	見出し、掲載日
1. Web（SNS）での広報が中心	
2.	
3.	
4.	
5.	

以上